

11:29 主の霊がエフタの上に下ったとき、彼はギルアデとマナセを通り、ついで、ギルアデのミツパを通して、ギルアデのミツパからアモン人のところへ進んで行った。
11:30 エフタは主に誓願を立てて言った。「もしあなたが確かにアモン人を私の手に与えてくださるなら、
11:31 私がアモン人のところから無事に帰って来たとき、私の家の戸口から私を迎えに出て来る、その者を主のものといたします。私はその者を全焼のいけにえとしてささげます。」
11:32 こうして、エフタはアモン人のところへ進んで行き、彼らと戦った。主は彼らをエフタの手に渡された。
11:33 ついでエフタは、アロエルからミニテに至るまでの二十の町を、またアベル・ケラムに至るまでを、非常に激しく打った。こうして、アモン人はイスラエル人に屈服した。
11:34 エフタが、ミツパの自分の家に来たとき、なんと、自分の娘が、タンバリンを鳴らし、踊りながら迎えに出て来ているではないか。彼女はひとり子であって、エフタには彼女のほかに、男の子も女の子もなかった。
11:35 エフタは彼女を見るや、自分の着物を引き裂いて言った。「ああ、娘よ。あなたはほんとうに、私を打ちのめしてしまった。あなたは私を苦しめる者となった。私は主に向かって口を開いたのだから、もう取り消すことはできないのだ。」
11:36 すると、娘は父に言った。「お父さま。あなたは主に對して口を開かれたのです。お口に出されたとおりのことを私にしてくださ

い。主があなたのために、あなたの敵アモン人に復讐なさったのですから。」
11:37 そして、父に言った。「このことを私にさせてください。私に二か月のご猶予を下さい。私は山々をさまよい歩き、私が処女であることを私の友だちと泣き悲しみたいのです。」
11:38 エフタは、「行きなさい」と言って、娘を二か月の間、出してやったので、彼女は友だちといっしょに行き、山々の上で自分の処女であることを泣き悲しんだ。
11:39 二か月の終わりに、娘は父のところへ帰って来たので、父は誓った誓願どおりに彼女におこなった。彼女はついに男を知らなかった。こうしてイスラエルでは、
11:40 毎年、イスラエルの娘たちは出て行って、年に四日間、ギルアデ人エフタの娘のために嘆きの歌を歌うことがしきたりとあった。

聖霊がエフタに臨み、彼は力を受けて進み出した。そこでエフタは主に誓願を立て、人を全焼のいけにえにすると約束してしまいました。その結果彼は娘を犠牲にしてしまったのです。

聖霊の力を受けたからといって、その人が完全になるわけではありません。主に用いられても謙遜になり、早まった考えを押し通すことのないようにしなくてはなりません。

彼は娘だったので嘆きましたが、他の者であればそれで良いというものではないはずです。全焼の意味については、娘が実際に殺されたのか、または霊的な意味での全焼であって献身を意味するのははっきりとはわからないことではありますが、いづれにしてもエフタが誓願したことは全くうかつなことでした。

そもそも神様と取引をすることは何ら信仰的ではありません。取引は対等の立場の両者がするも

のです。現代も自分の願いを聞いてもらうために、何かを断ったりささげたりするクリスチャンもいますが、むしろ主を信頼し祈って、主のみわざを待つのが信仰の姿です。人間の取引によって勝利したと言わないためです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

